

## II. 文献レポート

1. C. Samuel Storms, *Healing and Holiness: A Biblical Response to the Faith-Healing Phenomenon* (New Jersey: Presbyterian and Reformed Publishing Company, 1990)

A. 著者 (1951-) は、ホイートンカレッジで神学を教えたこともあったが、2004年から、カンザスシティにある Enjoying God Ministries 団体の総裁となっている。ダラス神学校でデイスペンセンション神学を学ぶが、カルヴィニストになり、1993年にはヴィンヤードの教会牧師・教師となった。本書は、このような著者の信仰的神学の変化の中で書かれたことになる。組織神学者、ジョナサン・エドワーズの研究者でもある。著者の神学理解とその変遷については、*Convergence: Spiritual Journeys of a Charismatic Calvinist* (Greenwood, Missouri: Oasis House, 2008) や Wayne A. Grudem (ed.) の *Are Miraculous Gifts for Today? : Four Views* (Grand Rapids: Zondervan, 1996) などが参考になる。

B. 本書は、副題にもあるように、当時の北米キリスト教界を席巻していた癒しの運動の主張や現象に対する聖書的神学的分析と評価をコンパクトにまとめたものである。全体的には、福音主義的カルヴィニストとしての応答になっている。「前書き」を書いている J.I. パッカーも、癒しの諸問題に関して、本書は聖書的で健全な書であると推奨している。内容的には、単に身体的な「Healing」だけでなく、全人格的な癒しを考えている（「Holiness」が大切）。また、癒しの運動の問題とともに、癒しに関わる重要な神学的課題（例えば、神の不変性、癒しと幸福、癒しと信仰、信仰と医療、からだと心、サタン・罪・苦しみ、神義論など）が、関係する聖書箇所（例えば、イザヤ 53: 4-5; マタイ 8: 17; 1ペテロ 2: 24; ヨハネ 14: 12; ヤコブ 5: 14-15; 2コリント 12: 7以下; ローマ 8: 28 など。また御子の癒し、使徒の働きにおける癒し、手紙における癒し）に基づいて注意深く論じられている。

C. 特に教えられた三つのことを簡単にまとめておきたい。第一は、「神の不変性」の問題についてである。今日的な奇跡や癒しを強調するときに、しばしばヘブル 13章 8節が引用される。しかし著者は、神の本性的不変性と、神

のみ業の多様性とを区別する。つまり、私たちの神は不変のお方であるが、ご自身を私たちにあらわされる方法やみ業はいつも同じであるとは限らない。第二は、癒しにおける信仰の役割についてである（第8章）。興味深いことは、御子の癒しに多様性がある、しばしば強調される「信じて癒される」ことは、御子の癒し物語において絶対的規範になっているとは限らない、ということである。こうして、癒しの運動における「信仰」とその役割の絶対化に対しては疑問を投げかけている。第三は、苦しみにおける神とサタンの協働の意味についてである。神義論の問題とも関係してくるが、「パウロの肉体のとげ」について論じる中で（第11章）、著者は、「神とサタンが同じ出来事が起こることを願っている」と述べている。十字架の出来事も、パウロのとげもそうである。

D. 二つの問題を指摘しておきたい。第一は、「カリスマ運動」の定義についてである。第1章の注1で、著者は「charismatic movement, charismatics (カリスマ運動、カリスマ派)」の定義の問題に一応触れているが、それでもなお不十分である。カリスマ運動、カリスマ派と言ってもあまりにも多様で幅広いからである（ペンテコステ派や第三の波も含めて「カリスマ派」と言われている場合もある）。問題として引用されている「カリスマ派、癒しの運動家」の多くは、むしろ「新」カリスマ派に属しており、ペンテコステ派でも、従来のカリスマ派でもないと言っておいたほうがよいだろう（この理解は、Michael Moriarty の *The New Charismatics* [Grand Rapids: Zondervan, 1992] に従っている）。第二は、イザヤ 53章（マタイ 8: 17; 1ペテロ 2: 24）の解釈についてである。著者は、この解釈問題を注意深く取り扱っていて有益であるが、ただひとつだけ指摘させていたいただきたい。マタイが、御子の癒しの業に注目して、これをイザヤ 53章の成就としている以上、後者の「病を負い、・・・痛みをになった」を換喩表現 (metonymy: つまり、原因である「罪」と言う代わりに、罪の結果のひとつである「病」を比喩的に表現している) としてだけ解釈して片付けることには無理があるのではないか。むしろ、文脈的に、罪の贖いが中心であることは明らかであるが（したがって、罪の赦しと病気の癒しを同等に並置することに問題がある）、メシヤの「救い」には、様々な問題や困難から

の救いも同時に含まれており、この箇所をそのまま文字通りに理解することとできるのではないか（メシヤの救いの広がり多様性については、ルカ4:16-21も参考になる）。

E. 聖書の取り扱い扱いに関して、非常に注意深く、その解釈は信頼できる。議論も思慮深く丁寧、しかも限られたスペースの中にコンパクトにまとめられ有益な議論が多い。どの神学的立場にあっても、病氣と癒しに関してまず読んでおきたい著作のひとつである。

## 2. Jean-Claude Larchet, *The Theology of Illness*, John and Michael Breck, trans. (NY: ST Vladimir's Seminary Press, 2002)

A. 著者（1949-）は、ギリシヤ正教のいわゆる教職ではないが、フランスのストラスブールにある学校の哲学教授であり、特に教父学の専門家でもある。また、ギリシヤ教父に関わる、霊性神学や病氣・癒しなどに関係する著作が多い。

B. 「病氣」そのものについて一番重要で知りたいところを神学的に取り扱っている書である。筆者自身も、このような著作を探し求めている中で見つけた稀有な書のひとつである。本書のアプローチは、福音主義の通常のやり方と同じではない。また内容も（使用されている用語も含めて）、基本的にはギリシヤ正教徒のために準備されたものと言える。しかしそれでも、本書は、他の書にない、病氣についての本格的な取り組みが含まれており、「病氣の神学」を求めている者たちには大いに参考になる。神学的哲学的な表現や議論もあるが、それでも全体的には一般読者のために専門用語の羅列を避け読みやすいものになっている。原書（フランス語）は1991年に、英訳は2002年に出版されている。病氣とそれに関係した諸課題を網羅している著作ではないが、神学的・霊的にも、実際のにも最も重要な課題（病氣の起源と意味、また癒しの意味など）について、現代医学の問題や限界を意識しながら、聖書とギリシヤ教父の知恵に基づいて議論を積み上げている。

C. 第1章の病氣の起源（*The Origins of Illness*）では、私たち人間が死か不死かではなく、両方の可能性をもった存在として創造されたことを確認すると

ともに、病氣の起源の理由を分かりやすくまとめいく（神が病氣、死を創造されたのではなく、病氣は罪から来ている）。第2章の病氣の霊的意味（*The Spiritual Meaning of Illness*）では、健康がすべてにおいて善であるとは限らないし、病氣がすべてにおいて悪ではないと前置きしながら、病氣における神の御心や目的を明らかにする。消極的なことばかりではない。神は、魂の健康のため病氣を許されることもある。墮落の結果であった病氣が、その人の魂の救いの道具にもなる。また病の中で祈りの重要性を確認している。とにかく、聖書と教父たちの知恵と経験に基づきながら、聖書的に神学的に病氣についての、健全な病氣の神学を求めている。神学的な取り扱いをしようとするほどの病氣に関しても、思索的な論究のみに終わってしまふことが多いが、本書は同時に、神にある霊的なあり方や霊的成長を念頭に置きながら病氣について考えていると言える（ギリシヤ正教の神学が「霊性神学」と呼ばれる所以でもある）。第3章の癒し（*Christian Paths toward Healing*）では、現代の医療の限界が明らかにされているが、しかしまた、どんな世俗的治療法（癒しの方法もまためて列挙されている）も神のものであり、神が、それらを通して癒しの業をなさることが強調されている。最後に、注目したことから一例を挙げておきたい。著者は、彼の基本的スタンスでもあるが、現代の医療とその根底にある現代文化がもつ非人格化の問題を問いつながりながら、病氣、苦しみ、治療、健康について再考し、あくまでも神との交わりの中でこれらの問題を扱おうとしている。「この世界において完全な健康は、絶対的な形では存在していない。健康はいつも部分的で一時的な均衡のことである。……理想的な健康の概念は、私たちの理解を超えたものである（53頁）」。

D. 第一に、ギリシヤ教父（ギリシヤ教父だけでないが）の引用が多く、彼らの知恵が聖書のように（同等に？）扱われていることが気になる。また聖書を聖書で解釈するというよりも、聖書を教父の知恵で解釈しているように見えるところもある。筆者としては、聖書解釈や教父たちからの引用についても、更に注意深い精査を求めたいところである。第二に、当然のことながら、ギリシヤ正教の霊性神学の流れにあることを心に留めつつ、本書を読む必要がある。またギリシヤ正教独特の神学表現がいくつ含まれているので確認しておきたい。「*deification*: 神化（神になるというよりも、実際には、聖化に近い意味）」。

「divine energies : 神的エネルギー (神ご自身の本質そのものではないが、そこから被造物に対して注がれている栄光の光、神的恵み・力・業・意志などが含まれる)」、 「uncreated grace : 非創造の恵み (創造前からすでにあった神的エネルギーを指す)」。

E. 「病氣の神学」に関する、有益で稀有な書として本書をお薦めしたい。

### 3. パウル・トゥルニエ、赤星進訳 『聖書と医学：ある医師の臨床体験の中から』 (聖文舎、1970年)

A. 著者 (1898-1986) は、日本語に訳されているものだけでも17冊以上あって日本でもよく知られている。トゥルニエ自身をさらに知るためには、赤星進氏らによる『神学と精神医学の間：トゥルニエとの出会い』 第三集 (聖文舎、1985年) や Monroe Peaston, *Personal Living: An Introduction to Paul Tournier* (New York: Harper & Row, 1972) などが参考になる。面書には、トゥルニエの家庭的、神学的背景とともに、主な著作の解説がある。

B. クリスチャンの医療関係者に、これほど影響を与えてきた著作は他にないと言ってもよいかもしれない。原著の初版は1951年に出版されており、内容的には時代遅れになっている部分もあるだろう。また、体系的に整理されたものを提示しているわけではない。しかしながら、それでも多面的に「聖書と医学」について、聖書の教えや他の神学的医学的専門家たちの言葉、そして自らの体験を交えて分かりやすく解き明かし、現在でも、クリスチャンの医療関係者 (介護福祉者やカウンセラーも含めて) や牧会者に、ぜひとも読んでいただきたい著作である。

C. 本書の第一部の「聖書の見解」では、どんな病氣でも二つの異なる次元の問題を含み、第一は科学的取り扱い (医療)、第二は霊的取り扱いが必要になることを指摘し、後者の重要性和その取り扱いについては、「聞くこと、理解すること、愛すること、祈ること」が重視されている。また聖書がもつ知恵の素晴らしさを確認した上で、二元論ではなく、一元的な医療、真の科学と聖書の一致を強調する。こうして、医学、自然、物質的なこと、夢、性本能、毎日の出来事なども、二次的なこととして軽視してはいない。第二部「魔術の問題」で

は、魔術と信仰を峻別しながら、科学 (医学) の中にも魔術性があることを指摘する (神格化された医学)。「キリスト教医学」という言葉の中にも魔術がある。とにかく、このような魔術的誘惑はどこにでもありと述べる。しかしまた、魔術を恐れて大胆な行為を控えるところにも問題があると言っている。最後に、魔術的なものではなく、患者や医師にとって重要なことは、「人格的統合」であることを明らかにする。第三部「生命、死、病氣、治療」では、医療に関わる重要課題の意味 (生命、死、病氣、医師とその使命、罪と病氣、苦難、治療、医学) について、聖書に基づき、また神学的医学的洞察を加えながら説明している。第四部「選択」では、医療関係者が何を第一にして医療行為をすべきか問うている。ここで、自身の「人格医学」を強調し、イエスキリストとの交わりを究極善として勧め、これもまた治癒力の源泉であると付け加えている。

D. 21世紀に入り、生命倫理の分野だけでなく、その他の分野においても、聖書 (福音) と医学 (医療) 間の対話や交流 (またその学び) が、ますます必要になって来ていると感じているが、現実には、前世紀後半よりも少なくなってきたのではないかと危惧する面もある。そのような状況下で、筆者としては、トゥルニエをもう一度読み直し、批判も含めて再評価していく必要があるのではないかと思っている。上記のピーストン (Peaston) の著作にも、多くはないが、トゥルニエについての一般的批判が紹介されているので簡単に紹介しておきたい (第10章)。第一に、トゥルニエは、医学と治療の中に宗教的重要性を持ち込んでいる。第二に、治療方法に関して、現代の医療においては、患者と医者との関係は重視されるが、そのあり方は分離的なものである。しかしトゥルニエは、愛と理解をもって患者にインボルブしていくことを強調している。第三に、彼の著作には、体験的逸話が多く用いられている (客観的有効性の問題)。

E. 現在でも十分に益する内容が含まれていて、読みやすく教えられることの多い著作である。特に医療関係者や牧会者にお薦めしたい。

#### 4. D. Martyn Lloyd-Jones, *Healing and the Scriptures* (Ontario: Oliver-Nelson Book, 1988)

A. 著者 (1899-1981) は、20 世紀の福音派リーダーのひとりであった。初めは外科医となつて働いたが、のちに召命を受けて牧師となり、著名なキャンベル・モルガンの後を継いで、ウェストミンスター・チャペル (ロンドン) の牧師として奉仕を続けた (1939-68 年)。

B. 本書は、1953 年から 1974 年までの間に、彼が、医療関係者のために講演してきたものをまとめたものである。付録を含めて 11 の講演が含まれ、そのうちのあるものは、50 年以上前のものである。したがって、時間的にも空間的にも、現在の日本とはかけ離れた医療状況において語られたと言えるかもしれない。しかし、医療の著しい発展に伴う変化 (または危機) に直面する中で、ロイドジョーンズが、医療経験者として牧会者として語ったことに、現代のクリスチャンの医療関係者たち、また、病氣や様々な苦しみ直面している人々を導く牧会者たちが、耳を傾けるべき多くの示唆が含まれていると思われる。

C. 特に注目したことを挙げておきたい。著者は、第 2 章 (The Supernatural in Medicine) で、奇跡的な癒しの可能性について述べている。クリスチャンの医師は、「faith healing」をどのように考えるか。奇跡を否定する人々の三つの理由 (心理学的現象にすぎない。今は、自然の法則による閉ざされたシステムの中にいる。使徒の時代以降、奇跡はない) に対して、奇跡の例を挙げ反論する。また近年、これまでの科学的な見方が変化してきたことにも触れている (19 世紀以降の科学的思考の問題や限界)。ただし何でも信じるのではなく、注意深い吟味の必要を強調する (「Open but Cautious」)。特に教えられたのは、第 4 章 (Will the Hospital Replace the Church?) で、医療をつかさどる病院とそのシステムが進展していく中で、これからの病院と教会の関係について考えている。医療と教会は、ともに協働する必要がある。そして教会の働きは、人々を、神との関係の回復に導くこと、また病氣の症状ではなく、その奥にある問題を扱うものである。第 8 章 (Fullest Care) も重要である。医療の限界や不足を指摘している。病や苦しみ、不安のもとには、私たち人間が創造者から離れてしまったという問題がある。したがってキリスト教だけが、本来の意味で、全人的な扱い

をすることができ、教会は、医療の働きの一部分ではない。医療関係者のためにも働くことができる (愛、自己犠牲の働きのために)。延命だけではなく、永遠の備えをする必要がある。

D. ロイドジョーンズは、緻密な釈義に基づき聖書講解者として知られている。しかし本書は、聖書箇所引用と解説はあるものの、これまでの著者の経験や聖書理解に基づいて、クリスチャンの医療関係者たちに対して語られた講演集である。これらに一貫して流れているものは、医学の発展に伴い、様々な医療分野で起こっている変化と様々な問題について、クリスチャンの医療関係者 (牧会者たち) に助言を与え、根本的指針を明らかにするものである。また、直接引用しているわけではないが、基本的には、トウルニエの主張と類似していることが多い。もしあえて違いを強調するならば、トウルニエは、より個人的な取り組みを考えているが、ロイドジョーンズは、教会と医療の関係 (区別と協働)、教会がなすべきことをまず取り上げていると言えるだろう。

E. 本書も、聖書 (福音) と医療について多くのことを学ぶことのできる有益な書である。時代的にはやや古い、トウルニエの『聖書と医学』と合わせて読んでいただくと、よいのではないか。

#### 5. James Woodward, *Encountering Illness: Voices in Pastoral and Theological Perspective* (London: SCM Press, 1995)

A. 著者 (1961-) は、イギリスの実践神学の専門家のひとりである。現在は、アングリカンの St Mary's church の牧師、Lady Katherine Leveson 基金のリーダーである。またカーディフ大学の実践神学の名誉研究員でもある。最近では、ステフィン・パッツェイソン (Stephen Pattison) とジョン・パットン (John Patton) とともに、*The Blackwell Reader in Pastoral and Practical Theology* (Oxford: Blackwell Publishing, 2000) の編集や、*Befriending Death* (SPCK, 2005) を著している。

B. 本書は、『病氣』とは、人々が考えるかもしれない、単一で正確に定義づけられるような実体ではない (1 頁) ことに基づき、経験と伝統、実践と理論を、ダイナミックに、またホリスティックにまとめようとするものである。



る。したがってまず何よりも、病氣に遭遇した人々、またそのことに関わる人々の多様な声を聴きつづけることを大切にし、その上で病氣について、神学的に牧会的に、より広く、より深く、より現実的に熟考していると言える。こうして、病氣と病氣に苦しむ人々についての「教科書」のようなものではなく、ただ読者を、紙面を通して、実際の病氣についての幅広い、またより深い理解に招こうとしている。本書に含まれる 10 章は、病氣に関わる多様なダイメンションを表していると言える。

C. すべてを取り上げることはできないので、その一部を紹介したい。第 1 章 (Pain, Loss and Anxiety: Exploring human experience in the light of illness) で、特に指摘されていることは、医療における「人格的な次元」の重要性である。医療は発展しても、患者自身（その感情も含めて）を取り扱うことには失敗している。どんな専門的な治療をもっても、人格的な次元をカバーできないのはない。ここで神学的な次元の重要性が確認される。ある人は、病氣のゆえに、自分自身は部分的にしか生きていないかのように思うかもしれない。しかし反対に、病氣によって、より深く生きることができるのである。病氣との遭遇は、自己を再発見するとき、また神との遭遇のときでもある。第 2 章

(Waiting, Watching, and Hoping : Exploring the perspectives of relatives and friends) では、患者ひとりひとりの尊厳が確認され、尊敬をもって扱われるべきこと（ひとりひとは違う存在）、プライバシーの重要性が強調される。また患者は、ただ受身であるだけでなく、癒しのプロセスに積極的に参与する者として、患者にも部分的な支配権を与えるべきであると指摘する。イエスは、癒す人とともに、また癒される人とともに働いてくださった。聖霊は、何よりも、待ち、見つめ、望むことに関係して、ともに働いてくださる。ここで、患者を深く見守ることの重要性が語られる。第 4 章 (Stigma, Prejudice and Projections: Exploring illness as a social and cultural reality) では、病氣の悲しみや問題が、単に病氣だけで終わらないことが指摘される。例えば、エイズ患者の場合には、社会的、倫理的、政治的な次元が大きく関わっている。第 5 章 (Separation, Alienation and Powerlessness: Exploring experiences of pastoral care) では、真の牧会的ケアとは何かについて考えている。病院の管理者は、チャプレンとカウンセラーのどちらを採用するかを決める権限がある。神学的理論を、どのよう

に牧会的ケアに生かし、また適用できるかという問題にも触れている。第 9 章 (Beginnings, Endings and Transitions: Exploring death and bereavement) では、非常に重要なテーマが最後に扱われている。病氣になるということは、死を考えることでもある。死を隠さないで、患者を大切にケアするということは、患者の現在の命を扱うことにもなる。

D. 著者のアプローチは、ダイナミックでホリスティック、さらに「open-ended and never-ending」なものである。これは、ポストモダンに呼応し、病氣を考える上で、非常に現実的であると言える。しかしそれでも、「教科書」とは言わないまでも、ある程度までの指針や提言があってもよいのではないか。上記のラルシェ (Larchet) のアプローチとともに併用したい。

E. まとめ：著者は、「病氣」の現場にいる人々の様々な声を聴きながら、病氣を、より広く、より深く、より現実的に理解し、最終的には、チャプレンとしての経験と、注意深い分析と熟考によって、病んでいる者たちを見守り、耳を傾けていくことを強調している。本書は、まさに「学際的な牧会の書」と呼べるものではないか。

### III. その他の文献短評

1. Edwin C. Hui, "Body," "Healing," "Health," "Sickness," Robert Banks and R. Paul Stevens, ed., *The Complete Book of Everyday Christianity: An A-To-Z Guide to Following Christ in Every Aspect of Life* (Downers Grove: InterVarsity, 1997)

編集者の二人は、実践神学や霊性の分野でよく知られている。バンクスは、フラー神学校の The Ministry of the Laity の教授であった。またステューブンスは、リジェント大学の実践神学の名誉教授である。エドウィン・ホイは、リジェント大学の生命倫理や霊性神学などの教授である。

本書は、信徒の日常生活に視点をおきながら、そこで体験する、大小様々な事がらに関してできる限り神学的にまとめたものである。例えば、誕生日、選挙、園芸、税、親業、余暇遊び、老化、雑用、自動車、チョコレート、人権差別、社会運動・活動、漫画、クレジットカード、ディプレッションなど、300 以

上の日常的課題について、100人以上の神学教授や牧師、そしてその領域の専門家たちが精力的に執筆に参加している。その中に、ホイの“Body” (2頁), Healing (4頁), Health (4頁), Sickness (3頁) についての小論がある。限られたスペースではあるが、私たちの日常と深く関わっている「からだ、癒し、健康、病氣」の意味について、神学者として医師として、聖書神学的考察を重視しながら取り扱っている。内容的に、非常に注意深く、またバランスが取れ、信徒にも牧会者にも有益な論考である。本書は、最後に触れるステフィン・ウィリアムス (Stephen Williams) の指摘にも答えるものであり (2、3年早く)、その中の Hui の論文は、簡潔ではあるが、上記のラルシェ (Larchet) のアプローチに近い。

## 2. Garth D. Ludwig, *Ordered Restored: A Biblical Interpretation of Health, Medicine and Healing* (Saint Louis: Concordia Academic Press, 1999)

ルター派牧師であるとともに、メディカル人類学の専門家であったが (コンコーディア大学の教授)、1998年に召天し、本書は最後の著作になった。

人類的アプローチから統合を試み、何よりも「健康 (病氣や癒しとともに)」について考えている興味深い書である。読みやすく、よくまとまっておき、用語 (disease, illness, and sickness) の説明や医療システムについての理解から始めて、旧約と新約における健康 (shalom) や病氣について分析している (もちろん the Healer である御子が焦点になる)。そして聖書の、究極的真理としての健康概念を「Wholeness」として提示し、身体だけの治療ではなく、全人的な治療 (身体的、心的、霊的統合) を強調する。最後には、信仰と癒しの関係を取り上げながら、個人的な「Faith Healers」ではなく、「癒しの共同体」として、教会の癒しのミニストリー (みことばとサクラメント: 礼拝、賛美、祈り、聖餐式などを通して) の必要を訴える。著者は、「医療の目的のひとつを、order out of disorder の確立の試み」とし、病氣と健康の違いは絶対的なものでなく、相対的であり、「disease をもちながらも、信仰による order の回復によって illness が癒される」こともあると述べている。アプローチや視点において、他の著作と異なる面もあるが、多くのことを教えられた著作である。

## 3. 宇田進 「『全人』 (The Whole Person) のいやしへの接近」『聖書と精神医学—全人的いやしへのステップ』 (東京キリスト教学園 共立基督教研究所、1993年) 7~29頁

『聖書と精神医学』には、共立基督教研究所内に設立された「聖書と精神医学研究会 (1986年発足)」に属する医師や牧師たちによって執筆された7つの論文がある (共立モノグラフ No.5)。

その中の宇田氏の論文は、「病氣」に関わる根本的な神学問題を扱っている。人間論は、その中心性と緊急性にも関わらず、まだ充分には展開されていない。しかし、人間の罪の問題や非人格化が増大する現代社会において必然的に生じてくる心身の問題に真摯に取り組んでいくためにも、どうしても、「人間のアイデンティティ」問題に答えていく必要があることを確認している。その上で、人間が多次的な存在であること、また「内在的理性 (人間の自己絶対化)」の立場ではなく、それを超えた超越的視点に立って自己を見る、すなわち、創造の神との関係で人間自身を見ていくことの必要性が語られている。最後に、全人的いやしの内容にも深く関わる、人間の構成要素 (二分説か三分説か、そして一元説か二元説か) について、フォーケマやエリクソンなどを引用しながら、適切にまとめている。「全人的いやし」の実践が強調される時に、同時に、どうしても神学的に確認しておきたいことは、「人間とは何か」である。本小論は、簡潔に、またやや紹介的ではあるが、非常に重要な情報と健全な判断を私たちの前に提供していると言える。筆者としては、21世紀初期の神学的状況において、宇田氏が提示された、人間論に関わるいくつかの重要な事柄が、さらにどのようなように展開されて来ているのか知りたいところである。

## 4. Nigel M.de S. Cameron, *The New Medicine: Life and Death After Hippocrates* (Wheaton: Crossway Books, 1991)

長年の間、トリニティ神学校で、生命倫理などを中心に教えていたが、現在は、チャールズ・コルソンによって創設された、ワシントン DCにある The

Wilberforce Forum (a Christian worldview think tank) の長になっている。本書は、筆者が、カメロン教授による「Contemporary Ethical Issues and the Pastor」というクラスを受講した時に読み、感銘をうけた必読書のひとつである。クリスチャン以外の医療関係者にとっても有益な、医療倫理に関する重要な著作である。

本書は、現代の医療倫理の根本を再検証するものである。西洋医学の長年の歴史の中で、医療と医療従事者たちの役割や倫理の根本的土台（医師には、医療技術だけでなく、道徳的献身が必須である）になって来たと言える「ヒポクラテスの誓約」の意味と重大性を再確認するとともに、現代の医療倫理（ポスト・ヒポクラテス主義：医療技術と消費者である患者に満足を与えることが結びつく）とその実際の逸脱と混乱の事実を鋭く指摘している。例えば、弱者に対する力の倫理の問題（堕胎や安楽死）とその背後にあるものを明らかにしながら、もう一度、「ヒポクラテスの誓約」とその原理に立ち返ることの重要性を注意深く、徹底的に論じている。歴史的に言えば、後に、この誓いに、ユダヤ・キリスト教的価値観が大きな影響を与えてきたことは確かであり、両者の根本的内容（生命の尊厳、いのちと病人を尊敬する）に類似点が多いが、本書は、クリスチャンの医療関係者だけを念頭に著されたものではない。最先端の多様な生命倫理問題を考えていく上でも、読んでおきたい重要な書である。

#### 5. Morton T. Kelsey, *Healing and Christianity* (N.Y.: Harper & Row, 1973)

著者は、ノートルダム大学の教授でもあり、監督教会の牧師でもあった。カール・ユングのもとで心理学を学んでいる。

「癒しの歴史」に関して学びたいと思えば、まず本書にあたるとよい。実際に、著者は、旧約聖書の時代から今日に至るまでの癒しの現象を精査し、その上で、癒しの働きの盛衰の神学的理由を探っている。これほどに歴史全体に渡ってクリスチャンの癒しを包括的に扱っているものは他にない（全体で約400頁の大著）。こうして、医学的、哲学的、心理学的考察を加えて、現代の教会における癒しの働きを回復させるために必要な歴史的、神学的土台をつくり上げている。現代の教会が、かつての癒しの信仰と實際を失ってしまっている理由が挙げられているが、重要な指摘が含まれている。一般の医療の方が、心的

宗教的癒しの効果に関心を持ち始めているのに、教会はなおも、聖書の時代からの癒しの恵みに気づかず、この恵みから離れたままにあることを指摘している。著者は、正統派プロテスタントやカトリックの状況だけをほとんど見て判断している嫌いがあるが、実際には、すでにこの時期において、様々なタイプの癒しの運動が広がったことも確かである。日本語で、癒しの歴史について学びたいなら、キース・M・ペーリーの『忘れられた恵み』（いのちのこ とば社、1984年）がある。ペーリーは、A.B. シンブソンなどからの「神癒の恵み」を強調している。

#### IV. おわりに

「病気の神学」についての神学的展開の有無に関係する二つのことに触れさせていたきたい。ひとつは、「病氣と癒しの神学」に関しても、欧米の神学から学ぶべき多くのことがある、ということである。例えば、10年以上前になるが、カナディアン・セオロジカル・セミナリー（Canadian Theological Seminary）で、「Scriptural Laments: Essentials for Contemporary Ministry」というコースがあることを知ってぜひとも参加したいと思い、コースのシラバスを取り寄せたことがあった（結局、参加できなかったが）。その時、予定されている講義内容を見て非常に驚いた。それは、エレミヤ書、哀歌、詩篇などにある「悲しみ・苦しみ」から学び、病氣や死などから来る「悲しみ、喪失感、憂鬱（Grief, Loss, and Depression）」の問題を牧会的に取り扱おうとするものであった。特に、聖書的な「嘆き・悲しみ」を個人的なディポジションや教会の礼拝の中で生かすことを目的としていた。これは、牧会学の一コースではあったが、「悲しみの神学」なるものが、クラスの中で取り扱われるほどに神学的に展開されていたのである。このことはまた、上記の文献レポートからも確認していただけたと思う。

もうひとつは、「病気の神学」に関する本格的な神学的試みは、まだ充分には進展していない、ということである。例えば、ステフィン・ウィリアムス（Stephen Williams）は、その論文の中で、ロバート・バンクス（Robert Banks）の著書 *All the Business of Life: Bringing Theology Down-to-Earth* (Sutherland,

Australia; Tring, England: Lion, 1987)を取り上げ、「work, commuting, chores, shopping, sport, family, health, security, hobbies, bills, sleep, waiting, friendship」などの日常的な事がらが、神学者たちの間で、なおも馴染みが薄く、歓迎されな  
いままになっている問題を指摘しているように（“The Theological Task and  
Theological Method: Penitence, Parasitism, and Prophecy” in *Evangelical Futures:  
A Conversation on Theological Method* [Grand Rapids: Baker, 2000], 160 頁以下）、  
日常的な事からの中で、特に身近で、緊要な「病氣」に関しても、まだ充分に  
は神学的に展開されていない。牧会神学的アプローチのものは増えているが、  
本格的な神学的取り組みと呼べるものは少ないと言わなければならない。この  
ことは、筆者が、限られた範囲の中であるかもしれないが、文献レポートのた  
めに準備しながら気づいたことがらであった。日常的な事からについての神学  
の必要をあらためて提言させていただきたい。

（同盟福音キリスト教会・岩倉キリスト教会牧師）